

寄稿 手塚貴晴(建築家、東京都市大教授)

自己表現への鋭い問い

ベネチア・ビエンナーレ国際建築展

©Andrea Sarti/CAST1466



●日本館「建築の民族誌」の展示風景
■国際交流基金提供の金獅子賞を受賞したエドゥアルド・ソウト・デ・モウラの展示
■筆者撮影

米国のカーネギーインターナショナルと並ぶ最高峰である。

いる芸術と言って良い。

無数の建築図面が展示されている。説明文には「Sage(使い方)」という言葉が使われている。

5月26日、波間に浮かぶイタリアの幻想都市ベネチアでビエンナーレ国際建築展の幕が上がった。日本では映画祭が有名であるが、美のところが同ビエンナーレには美術、音楽、演劇、舞踏などいくつもの分野がある。それぞれが2年間隔で入れ代わり立ち代わり開催される。世界で行われる芸術の祭典としては

今回のビエンナーレのテーマは「フリースペース(自由空間)」である。思想家フリードリッヒ・シュレーゲルによれば「建築は凍れる音楽」であるという。しかし今回のベネチア・ビエンナーレ建築展のテーマは真逆と言え。建築の本質は壁や屋根や柱といった物質ではない。よって凍りついてはいない。その間に起きる人の営みこそが大切なのだ。建築は生きて

ベネチア・ビエンナーレには大きな二つの会場がある。一つはジャルデイーニという名前の緑深い公園。思い思いの趣向を凝らした各国のパビリオンが並んでいる。もう一つ、ベネチア共和国の海軍造船所アーセナルを改装した巨大な本会場がある。こちらは世界から50人ほどの建築家を選ばれて展示をしている。日本館では貝島桃代らによる会場構成に従い、

並ぶのは一般庶民の暮らしに平凡な集合住宅や街並みである。その平凡な営みの中にある美しさをあぶり出す素晴らしい展示がなされている。派手な展示が目押ししたビエンナーレにおいて日本館は実に地味な様相であるが、建築の本来ありうるべき姿を歴史的社会的考察を重ねながら表現している、いつまでも飽きさせることがない。

本会場のアーセナルでは3組の日本人建築家が招かれている。伊東豊雄、SANAA(妹島和世、西沢立衛)、筆者とパートナーの手塚由比である。伊東豊雄はカーテンでクッションを囲い込み、幻想的な映像を写しこんだ。建築家の自己表現から建築を置き放ち、自由に誰もが楽しめる居場所を作る試みである。SANAAは薄いアクリルを三重に丸く立て、見る人によって見える像が変わる状況を作り出した。作家側ではなく訪問者に解釈を委ねようとする試みである。我々は楕円形の幼稚園の屋上を走り回る情景をドローンで空中から撮影し、それを模型に投影して、あたかもほんとうに子供が走り回っているかのような錯覚を引き起こした。

作品展示の中で最高賞となる金獅子賞を射止めたのはポルトガルのエドゥアルド・ソウト・デ・モウラであった。審査結果は全ての予想を裏切った。対象となった作品が新しい建築ではなく、朴訥な古い農家の移転であったからである。正直なところ、私も含めあらゆる手練手管を尽くし、全身全霊をかけて取り組んだ出展者たちは完全に意表を突かれた。大きな空間に展示してあるのは写真2枚だけ。説明文もわずからず。しかも受賞者は建築のノーベル賞にあたるプリツカー受賞者。今更ベストプレゼンテーションに対する金獅子賞は必要ない。

しかしである。一夜明けてみると何故にあの作品が選ばれたのかを理解し始めたのは私だけであろうか。建築家は世の中で頭一つ出るために必要以上の自己表現をせざるを得ない。いわゆる作家性の勝負となっている。今回の金獅子賞はそのような建築家たちとそれを取り巻く社会構造に警告を送ったのではないかと思うのである。ベネチアは幻想都市。ほんとうに何が起きるかかわからない。(つづか・たかはる)